



【小学校中学年の部】

読んだ本…野口英世

著者…馬場 正男

「野口英世」を読んで

小平小学校3年 吉田 昊生こうせいくん

ぼくは、ある日、おこづかいをもらいました。その千円さつにはひげのおじさんがかかれています。

人は、だれだろう。なんでこのおじさんは、おさつにかかれるようになったんだろう。」ときもんに思いました。図書室で、この顔のおじさんの本を見つけた。そして、「野口英世」という人だと分かりました。この本を読んでみたいと思い、本をかりることにしました。

読んでみると、野口英世は、小さいときにやけどをしたことを知りました。そして、やけどのことを友だちにからかわれるようになってしまいました。でも、英世はからかわれても、がんばって学校でべんきょうしました。ぼくは、すごいなと思いました。もし、ぼくが同じように友だちにからかわれたら、学校に行きたくなくなると思います。それから、べんきょうだつてしたくなくなつてしまいます。本を読んでいくうちにぼくは「英世はどうして、あきらめずにがんばることができたのだろう。」ときもんに思いました。そして、もつと野口英世のことを知りたくなりました。

英世があきらめずにべんきょうをつづけられたのは、お母さんがおうえんしてくれたのと、もくひようがあつた

【小学校高学年の部】

読んだ本…五体不満足

著者…乙武 洋匡

努力することの大切さ

小平小学校6年 臼井ちなつさん



「何なんだろう、この車いす。初めて見るな。」表紙を見て私はそう思った。さらによく見てみると、袖

から手が出ていないし、座っているのかと思いきや、足がない。「座っている」というより「乗っている」という表現が適切なかもしれない。

この「五体不満足」を読みすすめていくうちに乙武さんという人について様々なことが分かってきた。手足がないのは「先天性四肢切断」という障害。手が片方だけある人や一部分だけない人は聞いたことがあるし、テレビのパラリンピックの中継で見たことがある。しかし、手足がないということとはとても生活するには大変だと思った。歯磨きはどうするのだろう。鉛筆で文字は書けるのか。朝起きてベットから車いすに移れるのか。そんな疑問がたくさん浮かんできて、私の頭の中はクエスチョンマークだらけになった。しかし、私の心配はこの乙武さんにとっては、ちっぽけなものだということを教えられた。

まず、子ども時代の乙武さんは、遊ぶ時、自分なりの工夫をしていた。ジャングルジムの一番下を鉄棒代わりにしたり、縄跳びはみんなに回してもらって跳んだりしていた。もし私が同じ立場だつ

【中学校の部】

読んだ本…夏の庭

著者…湯本 香樹実

「夏の庭」を読んで

ひらた清風中学校2年 春日 彩花さん



「オレたち、あの世に知り合いがいるんだ。それってすごい心強くないか!」山下が、二人の友達に言ったこの言葉は、私の「死」に対する考えを大きく変えた。また、この本を読んで死とは何か、そして友情とは何か、考えさせられた。

主人公である小学生の木山、山下、河辺の三人は、山下の祖母の葬式をきっかけに、死について考える。そしてある時、「人は死んだらどうなるだろう」という思いから、一人の老人の観察を始める。

私は、この三人の行動には賛成できなかった。確かに、人は最期、どうなるのかは誰も知らない。だが、人が死んでしまう瞬間なんて、絶対に見たくないと思ったからだ。

観察を始めたばかりの頃の老人は、本当に今にも死んでしまいうような様子だった。しかしある日、少年達の観察がばれてしまう。案の定、三人は怒鳴られてしまったが、それからの老人の様子に変化があった。なんと、徐々に元気になっていったのだ。それと共に少年達との交流も深まっていき、次第に互いの存在がなくてはならないものになっていった。

特に私が心に残ったシーンは、三人が老人の奥さんである、古香弥生さんを探すシーンだ。戦争により、ちゃんとした話もできないまま別れてしまった二人を、何とか会わせてあげたいと思ったのだ。それだけでも十分、すごいことだと思うのだが、少年達の本当にすごいところは、実際に弥生さんに会ってしまったところだ。結局、二人を会わせることはできなかったが、この経験は、少年達にとって特別な経験となっただろう。

しかし、そんな彼らの夏は、突然終わりを告げた。老人の「死」である。三人がサッカークラブの合宿に行っている間に死んでしまったのだ。だが三人は、老人の死を素直に受け入れた。それはきつと、老人との関わりの中で、「友情」とも言える心のつながりが持てたからだ。私は思う。

私は今まで「友情」は同年代の友達との間で生まれるのが普通だと思っていた。しかし、そうではなかった。友情に、年代

からだと思います。英世のお母さんは、どんなに英世が楽しくても、おうえんしてくれていました。ぼくも、お母さんや家族におうえんしてもらえると、がんばることが出来ます。きつと英世もつらいことがあっても、お母さんがおうえんしてくれてるから、がんばろうと思っただけだと思います。

もう一つ、あきらめずにがんばることができたのは、どんなときでもよくひょうがあつたからだだと思います。英世は、いしゃになるべくひょうに向かつてがんばります。そして、いしゃのよくひょうをたつせいすると、そこで、まんぞくすることなく、いちりゅうのがくしやになるために、さらに、べんきようをつづけていきます。ぼくだったら、よくひょうをたつせいしたら、まんぞくしてしまうと思います。だから、一つのもくひょうにまんぞくしないで、新しいもくひょうを見つけて、どりよくする英世はすごいなと思います。ぼくと同じくふくしま県で生まれて、せかいでかつやくした英世がいたことが、とてもうれしいです。ぼくは、今、やきゅうのかんとくになりたいと思っています。そのために、ぼくは、やきゅうのれんしゅうをがんばっています。ボールをおいかけて、キャッチするれんしゅうが楽しくて、やめたいと思うことがあります。でも、英世がどんなにつらくても、あきらめずに、がんばっていたことを思い出して、ぼくもがんばっています。しあいにかるようになつていきます。英世のように、よくひょうに向かつて、一つ一つクリアしていきたいと思ひます。そして、いつかだれからもそんけいされるやきゅうのかんとくになりたいです。

たら、そのような工夫が思い浮かぶかどうか分からない。あきらめて室内で本を読んだり、友達との会話を楽しんだりするだけでもいい。乙武さんは、自分の障害を障害と考えず、様々なことに挑戦しており、なんて心が強い人なのだろうと思つた。

また、乙武さんがそのように工夫して遊んだり、普通に授業を受けたりするのは、自身の努力はもちろんだが、両親や先生方のたくさんの方の支えがあつたからだと思う。特に、学校生活の場面では、先生方は障害者だからといって甘やかすわけではなく、他の児童と同じように接していた。私が先生の立場だったら、「乙武さんは、できないことが多い。私がたくさんフォローしなくては。」と、全てのことに手伝いをすると思う。しかし、この乙武さんの先生は、乙武さんが大人になったとき、誰も助けてくれない人はいない。だからあえて厳しくしてきただけで、なんとすばらしい先生方だったのかと感心した。

私は、自分が無理だと思ふことは初めから挑戦することをあきらめてしまふ。しかし、乙武さんは、たくさんの方の技術を重ね、辛いことも乗り越え、今に至っている。手足がないからといって何もできないというわけではなく、たくさんの方の努力を重ねることが大切だと分かつた。私は今、学校で、卒業式に向けたピアノ伴奏の練習をしている。初めは、「無理だ。こんな複雑な曲は弾いたことがない。」とあきらめていたが、少しずつ練習を重ねるうちにできるようになつていく。これから努力することの大切さを胸に、卒業式で会場中の人を感動のうずき込ませたい。練習に打ち込んでいこうと思う。

なんて関係ないということを、この本に教えてもらった。また三人は、それぞれが親のことで問題を抱えているため、親に心が開けていなかった。だから老人との関わりは、三人にとつて友情をこえた、家族のような関係だったのではないだろうか。そんな関係を私も大切にしたい。

そして、「死」についての考えも変わった。私はずっと、死は怖いものだと考えていた。例えば、「もし自分が死んでしまったら……」と考えると、言葉では表現できないような怖さを感じる。しかし、この本を読んだことで、そんな私の考えはがらつと変わった。そのきっかけは、一つある。

一つは、木山の「さびしさや心細さは、結局は自分の問題だ」という考え。当たり前のことのようだが、私は、このことに気が付かなかった。本の中で、老人が死んでしまった時も、「かわいそう。」「もつと三人と一緒に、色々なことをしたかっただろうな。」「なんていうことを考えてしまつていた。しかし老人はきつと、精一杯立派に生きてたのだ。重要なのは、自分がどう思うか、ではなく、相手がどういう気持ちで人生を終えたか、ということだと気付かされた。

そして、もう一つは、「オレ、もう夜中にトイレにひとりで行けるんだ。怖くないんだ。」「だってオレたち、あの世に知り合いがいるんだ。それですごく心強くないか!」

という山下の言葉。この言葉に私は、良い意味で衝撃を受け、そして感動した。「あの世の知り合い」という言葉は「死」というものを認め、受け入れたことと、言えたのだと思う。また、死を受け入れるということは、老人との時間を全力で過ごしたからこそのできたことだと思う。一日一日を全力で過ごしたから、後悔もせず素直にお別れができたのだろう。三人と老人の友情の深さを、改めて感じる事ができた。そして、死んでしまった人は、残された人の心の中に生き続けるということを知った。なぜなら、老人の死後も三人は、その人を思い出して、悩んだときは、「おじいさんだったらなんて言うか」などと考える、老人を身近に感じながら過ごしていたからだ。

「夏の庭」を読んで、私は三人の少年達と同様、様々な気持ちになつたり、考えさせられたりして、成長できたと思う。人はいつか、必ず死んでしまふ。だからこそ、生きていくことを特別なことだと感じ、日々大切に過ごしていきたい。それと、忘れてはならないのは「死イコール終わることではない」ということだと思ふ。その人が生きてきた足跡や思い出は、消えることはないのだから。私はまだ、身近な人を亡くした経験はないが、もし、そんなことが起こつてしまったとしても、私はこう言える関わり方をしたい。「あの世に知り合いがいるんだ。」と。